文化史・文化理論の再構築

研究代表者　佐々木　　充

1．プロジェクト内容概略

現代文化とその表象の分析と理論化において，いま，一種の停滞感・閉塞感が生まれている。これまでの現代文化の研究が精神分析，構造主義，記号論からフェミニズム，ポストモダンに至る現代文化理論の導入と応用という形で主として行なわれ，研究者自身の拠って立つ文化的基盤を省みた研究が不十分であったこと，また，個々のテクストの特異性やメディアの固有性に目を奪われるあまり，テクストを産出する行為の水準，複数のメディアの相互関係，文化の産出と消費のあり方をグローバルに規定しているネットワークの変容といった，より動的な側面に対する意識が稀薄であったことに起因していると考えられる。こうした考察を前提にし，自己の知的･学問的関心の所在を見据えつつ，より動的な文化史・文化理論の再構築を本プロジェクトはめざしている。

2．参加メンバー

佐々木　　充（代表）
福　沢　榮　司
三　浦　　淳
齋　藤　陽　一
猪　俣　賢　司
逸　見　龍　生
番　場　　俊
石　田　美　紀

３．プロジェクトの進捗状況

【著書】

・石田美紀「「横顔の君」　佐田啓二」，四方田犬彦他（編著）『日本映画は生きている　第５巻　監督と俳優の美学』，岩波書店，2010年11月，245－270頁

【論文】

・Michiru SASAKI, ‘A Modern Voice in Ancient Times?: Ōtomo no Yakamochi and the Linguistic Situation of the Eighth Century Japan’, Voix et Modernités（Actes de colloque international du 15-16 mars 2010, Université Bordeau III）, Faculté des Sciences Humaines de l’Université de Niigata, 2011, pp. 11－22.

・「東京遊覧と南洋の反照としてのゴジラ映画史―成瀬巳喜男の『浮雲』とゴジラの歩いた戦後の東京―」新潟大学人文学部研究紀要『人文科学研究』，第127輯，2010年11月１日，113－151頁

・Satoshi BAMBA, "Modernity and the Condition of Voices in Dostoevsky," Voix et Modernités（Actes de colloque international du 15－16 mars 2010, Université Bordeau III）, Faculté des Sciences Humaines de l’Université de Niigata, 2011, pp. 109－117.

【講演】

・猪俣　賢司「東京と南洋を往復するもの―もう一つのゴジラ映画と引き裂かれた郷愁の帝国―」，全体主義研究会「全体主義を大衆文化から考える」，早稲田大学演劇博物館研究拠点プロジェクト「全体主義体制下における映像･演劇を中心としたマスカルチャーとメディアの総合的研究」主催，2010年10月23日，於新潟大学

【新聞への寄稿】

・三浦　淳「「ザ･コーブ」県内上映に寄せて　観客の知性を問う作品　根底に差別意識と傲慢さ」『新潟日報』2010年８月３日付け朝刊第15面